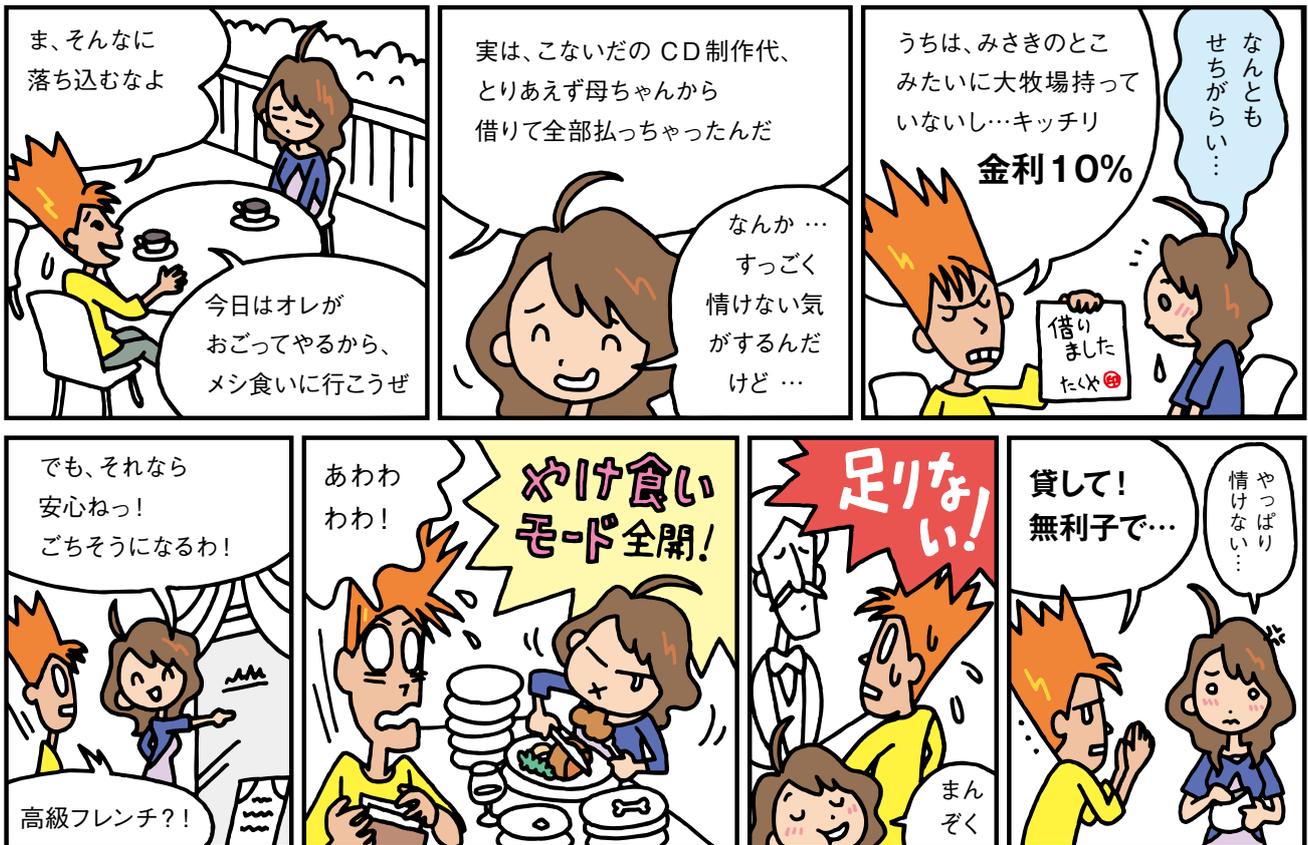


— 金利の違いに敏感になろう —



G 1 お金の貸し借り **お金を借りたら利息を払う!**

お小遣いを前借りしたときは、次の月のお小遣いを減らして返すことができますが、銀行からお金を借りた場合には、借りたお金を返すことに加えて利息を支払う必要があります。

利息とは、借りたお金の利用料として、借りた人（借り主）が貸した人（貸し主）に支払うお金のことです。

支払う利息の額は、金利によって異なります。利息額の違いは、そのまま支払総額（返済額+利息額）の違いにつながります。利息について正しい知識をもつことは、ローンやクレジットを上手に利用するためには欠かせないことなのです。



G 2 利息とは 利息はお金の利用料!

DVDなどをレンタルするときは、まず利用料を支払って、利用後に借りたDVDを返却します。お金を借りる場合に置き換えると、利用料が利息、DVDが借りたお金にあたります。

DVDは、見終わったら借りたものをそのまま返却できます。一方、お金は、使う目的があって借りるものですから、借りたお金そのものは使うとなくなってしまいます。利息とともに、将来の収入から返済することになりますから、返済するための収入が得られるかをきちんと考えて、計画的に利用しなければならないのです。



図G-1 モノを借りることとお金を借りることの違い



G 3 利息の計算 いくらになるか、計算してみよう!

「利息」は、**元金** × **金利** × **借入期間** で計算されます。
 「元金」とは、借りた金額のこと。元本ともいいます。
 「金利」とは、元金に対して一定期間に支払う利息の割合のことです。
 実際に利息を計算してみましょう。
 例えば、10万円を**年利10%**で半年間借りるとすると、その利息は次のようになります。



[元金]	[金利]	[借入期間]	[利息]
100,000円	× 0.1	× 6/12	= 5,000円

金利10%は、百分率だと0.1です。

金利は、ふつう「年利」といって1年間の利息の割合で表されるので、借入期間も年単位にあわせると、半年(6ヵ月)は6/12になります。

Q8 銀行などの金融機関から30万円を年利10%で1ヵ月間借りたとして、その利息を計算してみましょう。

利息=元金()円×金利()%×1/100×借入期間(/12)年=()円

G 4 金利の表示 見た目の数字に惑わされないこと!

利息や**金利**の単位には^{ひぶ}日歩、^{げつり}月利、^{ねんり}年利がありますが、年利表示が基本になっています。

- 日歩＝^{がんきん}元金100円に対する1日当りの利息の額。△**銭**△**厘**（あるいは△.△**銭**）と表します。
- 月利＝元金に対する1ヵ月当りの利息の割合。%で表します。利息の単位を1ヵ月として計算するもので、毎月返済する場合の返済額の計算に使います。
- 年利＝元金に対する1年間の利息の割合。年利の略。%で表します。利息計算の単位を1年として計算するものです。

利息が1日当り△**銭**△**厘**といわれると、「1日借りて利息が1円未満ならずいぶん安い」と感じるかもしれませんが、表面的な数字に惑わされてはいけません。必ず年利に換算してから比較してみましょう。

年利に換算するには、日歩で表示されている場合は365倍（うるう年の場合も同じ）に、月利で表示されている場合は12倍にします。

また、金利が**アドオン金利**で表示されていると、実質的な利率に比べて低いかにように誤解することがありますから注意が必要です。

銭、厘

銭は円の100分の1の単位。
厘は銭の10分の1の単位。

金利の上限

利息制限法では、金額に応じて金利の上限が決められており、これを超える利息は無効とされている。

- ^{がんほん}元本10万円未満は年利20%
- 元本10万円以上100万円未満は年利18%
- 元本100万円以上は年利15%

出資法の上限金利が29.2%から20%に引き下げられ、いわゆるグレーゾーン金利（利息制限法の上限金利と出資法の上限金利の間の金利帯で、一定の要件を満たすと有効となっていた）も廃止された。



G 5 金利の決まり方 コスト+リスク+儲け?

ローンの種類や借りる金額・期間などによって金利は異なります。

金利はどうやって決まるのか、お金を貸す側の立場で考えてみます。

銀行が貸し出すお金のもととなる預金には利息がつくことからわかるようにお金を貸すためにはコスト（費用）がかかります。お金を貸すときの金利は、このコスト以上の金利にする必要があります。

また、貸したお金のすべてが約束どおりに返済されるとは限りません。返してもらえなければ損をしますから、それをカバーするために、返済されないリスクも考慮した金利にします。

図 G-2 ローン金利の高低の関係（一般的なケース）

金利	高い ↑	低い ↓
担保	不要 ✕	必要 ○
使いみち	自由 ↔	限定 ↕
期間	長い →	短い ←
借り主の信用度	低い ↑	高い ↓

アドオン金利と実質年率

ローンなど何回かに分けて返済する場合、元金は毎回の返済によって減っていくため、利息の計算式は「利息＝借入残高×金利×借入期間」となる。

このように借入残高を基準として利息を計算することを前提として表示された年利率を実質年率という。

これに対し、当初借り入れた元金が減少しないと仮定して利息を計算する方法をアドオン方式という。

アドオン方式には、毎月の返済額や返済総額が簡単に計算できるというメリットがある。一方で、実質年率とアドオン金利が同じ利率の場合、利息負担はアドオン方式によるほうが多くなるが、表示金利が同じだと、利息負担も同じであると誤解されやすいという問題がある。

このため、アドオン金利を表示する場合には、実質年率も併記しなければならないことになっている。

6 固定金利と変動金利 好景気に上がって、不景気で下がる？

金利と経済には密接な関係があり、金利の水準は経済の状況によって上下します。

住宅ローンのような長期間にわたって返済するローンの場合には、返済している間に経済の状況が変わり、世の中の金利水準が変わっていくこともありえます。

住宅ローンには、金利の状況やライフプランに応じて選べるように、複数の金利タイプがあります。

●固定金利型（全期間固定型・段階金利型）

借りるときに決めた金利が返済が終わるまで変わりません。金利が高く変化していく経済状況のときに有利です。

●変動金利型

世の中の金利水準の変化にあわせて、一定の期間ごとに金利が見直されます。金利が低く変化していく経済状況のときに有利です。

●固定金利期間選択型（固定金利期間指定型）

変動金利を基本としながらも、固定金利期間（例えば5年など）をあらかじめ指定し、その期間が終了したときに金利を見直します。

どのタイプが有利かは、将来の金利水準、つまり景気がどうなるかによるわけですから、一概にはいえませんが、いずれにしても、こうした特徴をよく理解したうえで選択する必要があります。

金利と経済

金利もモノの値段と同様に、需要と供給のバランスによって決まる。需要（借りたい人）が多ければ金利が上がる。景気がよいときは、モノがよく売れ、企業は積極的に設備投資をするためにお金を借りる傾向があり、金利が上がる要因になる。

変動金利方式の金利見直し

半年に1回、短期プライムレートという指標をもとにして見直すことが多い。

しかし、金利が変わっても、一定期間（例えば5年間）は1回当りの返済額は変わらない場合が多く、急激に金利が上昇した場合には、利息が返済額を上回り「未払利息」が発生する可能性がある。返済額が変わるときも、それまでの125%までなどと上限を決められている場合が多い。

図 G-3 住宅ローンの金利タイプの特徴

金利タイプ	特徴	メリット・デメリット
固定金利型	全期間の金利を固定するローン。 (段階金利になっているものもある)	<ul style="list-style-type: none"> ● 契約時に返済期間全体の返済額を確定することができる。 ● 返済額が確定するので資金計画が立てやすい。 ● 金利水準が下がっても、将来にわたり高金利で返済しなければならない。 ● 金利水準が上がっても、将来にわたり低金利で返済をすればよい。
変動金利型	返済期間中に金利が変動するローン。 年2回の金利の見直し、返済額は5年ごとの見直しが一般的。	<ul style="list-style-type: none"> ● 同時期の固定金利型の金利よりも低いケースが多い。 ● 将来の金利の低下とともに返済額が減る。 ● 将来の金利の上昇とともに返済額が増える（未払利息が発生する可能性もある）。 ● 返済額が確定しないので資金計画が立てにくい。
固定金利期間選択型	一定（特約）期間の金利を固定するローン。 金利・返済額は特約期間終了後に見直し。	<ul style="list-style-type: none"> ● 同時期の固定金利型の金利よりも低いケースが多い。 ● 契約時から一定期間しか返済額を確定することができない。

“金利”のポイント



- 利息＝元金×金利×借入期間
同じ金額を借りても、借りる金利や期間によって支払う利息額が違う。
- 金利は、年利で表示されている。
- 金利には、固定金利と変動金利がある。

